

安永期における暁台の俳諧摺物について

— 東海市白羽家資料の紹介 (二) —

寺 島 徹

東海市横須賀の白羽家に、横井也有(一七〇二—一七八三)、加藤暁台(一七三二—一七九二)の摺物関係の資料が残っていることを「尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流について—白羽家所蔵資料を紹介して—」(東海近世27号、令和元年12月、以下前稿Ⅰ)において紹介した。「東海市白羽家資料の紹介(二)」(金城学院大学論集 人文科学篇16(2)、令和二年三月、以下、前稿Ⅱ)においては、その中でとくに、也有の一枚刷を全文翻刻し、また、関連資料を合わせみながら、当時の也有と知多俳壇の関係性について、いくらか知見を加えてみた。

前稿Ⅰでは、おもに紙幅の都合で、全文翻刻できなかつたため、本稿では、暁台関係の摺物資料の全容を翻刻するとともに、あらたに寛政期の暮雨巷の句合摺物資料を組上りにつせ、安永期の摺物と比較してみたい。

一 白羽家所蔵の暁台関係資料について

前稿Ⅱでも述べたように、白羽家は、現当主の白羽泰氏のご教示によれば、中世の頃、京から尾張横須賀へ来た山伏の家系である。大教院の一枚刷によれば、白羽監物が足利將軍家に仕え、津の国四天王寺を経て横須賀に来た家柄であることを伝える。横須賀にきた監物が大

教院(現・東海市横須賀町)を設け、その後、白羽家は、江戸時代を通じて、代々、修験道における山伏として活動するのである。

明治の廃仏毀釈によって、白羽家が代々院主をつとめてきた大教院は完全に荒廃してしまつたが、甚目寺の一解院日廣上人の布教活動により、あらたに明治二十一年に日蓮宗の寺として再興され、とくに戦前の復興を経て現在に至っている。

大教院には、関係の深かつた楓京の句碑が残され、現在に伝えられている。それとともに、江戸中期に、楓京の手元で集められた俳諧資料の一部が、大教院におさめられ、江戸末期までの院主であつた白羽家に伝えられたということである。江戸期の資料としては、俳書、俳諧摺物、一枚刷、一枚物の俳諧資料と和歌資料等の文芸資料、御用書留、証文などの古文書類からなる。

前稿Ⅰでは、白羽家の俳諧関係資料をリスト化し、(一)知柱亭と楓京の交流、(二)楓京にもたらされた俳諧資料、の二つに分けて検討し、所蔵資料の概要を紹介した。白羽家資料の中で、本稿でとくに取り上げるのは、後者の中の、

19 明和五年古川連中 摺物

20 安永二年(癸巳中秋望) 暮雨巷 摺物

21 暮雨巷左右句合(安永二年秋) 摺物 ※暁台巻軸

22 安永三年丈芝坊歳旦 一枚刷 摺物の四点である。

これに、21「暮雨巷左右句合」と時代は異なるものの、同種の試みである、「寛政三年暮雨巷句合」(仮題、藤園堂所蔵)という摺物にも、あらたに着目してみたい。

二 暁台と知多俳壇について

ここで、暁台と楓京の交流について、概略を掲げておく。

暁台関係の資料は、楓京と暮雨巷の俳諧交流のもと、暁台あるいは丈芝より楓京へ送られたものと推測される。楓京と暁台の交流について、富田康之氏「方間舎楓京略年譜」(論集近世文学4号、平成4年)を参照し、稿本を繕きながら、簡単に確認しておこう。明和五年(一七七八)の暁台歳旦に楓京、如東、逸之の三つ物がみられる。明和七年(一七七〇)十月二日、暮雨巷で興行された句会に一座。同年、『送別しおり萩』に発句入集。明和八年『東君』にも入集する。明和七年の半切の初表を楓京稿本『城下遊』(愛知県立大学図書館所蔵)をもとに、あげておこう。

きのふは千山万水の思ひを

隔つ。けふは暮雨巷の面前に (下略)

鳥や我われ梟の睡にむせぬ

白図

こゝろに華も咲かえるとき

暁台

海手から先暁の星きえて

都貢

最ふあれほどに下の弓張

史川

見台に飽けば頻りに秋深く

楓京

髭をくらべに来たり蟬 支朗

安永元年(一七七二)にも、撰者不明(暁台か)の歳旦に入集(『藻塩草』)。安永二年四月十六日に没した尾張宗匠の時節庵追善のうちに、追善百韻の其二には、也有の発句をもとに、暁台が第三を詠み、丈芝他の暮雨巷一門が連なる。『城下遊』を繕き、初表をみておきたい。

けふ程は竹も泪に染てこそ

半掃庵

その悌の風薫る時

従長

潮たるみ沖中川のおし出て

暮雨

人呼ぶ声に夜ハ明にけり

白図

差別に鹿毛なる馬を引居る

都貢

小高き丘を丸山といふ

令章

茱萸酒に九日の月の疾見えし

支朗

扇に書ける秋声の感

宰馬

(略)

只一偏に弥勒唱ふる

雨

咲ばちりさけばちりく華供養

楓京

霞もともに晴し雨雲

帯梅

その百韻で楓京は、暁台の句に付ける形で、初裏の花を詠んでいる。それに、横須賀の帯梅が付句をしている。知多俳壇と暁台の関係を象徴する運びであろう。

このように、楓京と暁台の直接の交流は、それほど親密ではないが、一定の交流があった様子はいかがか、このような風交の環境のもと、白羽家所蔵の暁台資料は、楓京のもとに渡ったものと考えられる。以下に翻刻資料の概要について、順に示したい。

〔資料19〕 明和五年古川連中 摺物

これまで未紹介の俳諧摺物。文通の東鯉は、雲裡坊系（後述、小倉氏稿系譜参照）の俳人。丈芝の俳諧活動を示す、比較的古い資料となろう。

丈芝は、安永三年五月十二日に楓京のもとを訪れている（『一人遊』続夏三）。

仙城下の丈芝風人にわが茅屋を訪れけるに、名府帰陽の砌にしてこの浦の船よばひしければ、置ぬ棚さがしにも及ばで風情なき別れにぞ有りける。予、三十年のむかし、東行の折から、仙府国分町菊池屋が許に三四宿をとり松嶋塩竈の好風を見巡りたる。そのゆかりをしたはれ侍りて

思ひきや千里はつ音のほとゝぎす

身はうき雲の若葉わけ来し

仙台 丈芝

と唱和している。この折に摺物も伝えたのであろう。

〔資料20〕 暮雨巷秋興摺物

安永二年の暮雨巷の秋興摺物も、これまで未紹介のものである。自図、羅城、都貢、支朗、亜満ら安永初期の暁台の高弟たちが揃う。暁台の発句を巻軸にいただいでいないのが、むしろ目をひく。支朗（士朗）の句は、他に出典が見られないものである。

〔資料21〕 暮雨巷左右句合

暁台資料の中で、もっとも着目されるのは、「暮雨巷左右句合」である。それぞれ天地という地の部分に裂け目があり、左右が地の部分をもとに一枚に繋がっていた可能性もある。

年代であるが、丈芝の「わすれ花」句が、安永二年十月四日付逸漁宛書簡（逸漁文庫俳諧資料集、綿屋文庫 二―一五〇）にみえる。一部引用してみよう。^{（註）}

：其節申上候通、其表、良夜御摺物暮雨巷社中ニも懇望之衆中有之、先以申願置候。尤拙国元へも相下シ申度候。最二三枚御恵投奉希候。最前沢山申請候へ共京都大坂其外へ相配りとくなくなり申候。ちか頃乍御面倒以重便御遣し被下候様奉頼上候。此旨暮雨巷よりもくれぐれ被申越候。

一、爰本摺もの出板入貴覧申候。各様へ御遣し可被下候。且別封毎度乍御世話御届被下度奉頼上候。

一、南河様へ別紙二而も御様子可窺申候處、此節取紛申候に付、重而よろしく御心得被下度奉存候。暮雨巷ニも岡崎より帰庵取込申事も有之候。此度ハ拙夫方より如此御座候。

丈芝

以上

初冬四日

逸漁様

わすれ花咲しやとミレバ咲にけり

と申捨候

この書簡により、丈芝来名（安永二年冬）の折のものであることが類推される。「爰本摺もの出板入貴覧申候」から、暁台たちの摺物（あるいは、仙台の摺物もの含むか）を作って逸漁ら、交流のある地方俳人たちに配っていたことがわかる。「わすれ花」句と時期の一致からして、この左右摺物を指していると考えてよいだろう。

また、支朗の改名は、安永三年夏に上洛したおりの蕪村との交流の旅以降であるため、安永二年の秋の摺物であることが裏付けられる。

左右とも、安永二（一七七三）年当時の暮雨巷の高弟たちが並んで
 いることがうかがえる。「時雨」「落葉」「霜」「忘れ花」「枯芦」「千鳥」
 「紙衣」の題をもとに句合を行い、さらに、摺物ごとに左と右で句合
 が対になる形で並べている。配置に工夫を凝らした摺物といえよう。
 このような拘りは、暮雨巷の俳諧指導の姿勢と密接に関係していると
 考えられる。暁台は、とくに、明和期・安永期に門弟指導の一環とし
 て句合を多用していた。拙稿「安永後期の加藤暁台と句合の試み」（国
 文学研究一九〇集、令和二年3月）に概要を述べた。現在わかっている
 暁台の句合わせとしては、以下のようになる。

『百二十番句合』（明和四（二七六七）蓬左文庫蔵）

『九十六番句合』（明和三（二七六六））明和四年頃、藤園堂蔵）

『後撰五十二番句合』（明和三（二七六六））明和五年頃、藤園堂

蔵）

『逸漁亭句合』（安永二（一七七三）、綿屋文庫他蔵）

『和漢牡丹合』（安永七（一七七八）、蓬左文庫蔵）

『十三番句合』（安永後期頃か、藤園堂蔵）

『寛政三年冬暮雨巷句合摺物』（寛政三（一七九一）、藤園堂蔵）

明和期のものは、版本『豎並集』（明和六年序）にも、成果として
 一部収録されている。今回紹介の摺物は、その延長上にある試みといっ
 てよいであろう。写本の句合は、暁台の批評性に富んだ判詞があり、
 門下への指導性の高いものであったが、その中から判詞を省く形で、
 作品を世に公表するという手法が採られていたとみえる。それは、安
 永七年の『和漢牡丹合』（垂満序、堀田文庫所蔵）の発展的な試みに
 も繋がるものである。そのような点でも、過渡期であるこの句合摺物
 は、注意すべきものと考えられる。そして、本稿で、あらたに『寛政

三年冬暮雨巷句合摺物』を暁台の句合の系譜に位置づけたい（第三節
 参照）。

なお、巻軸におかれる暁台句は、いずれも『暁台句集』に見えるも
 のであるが、「すらく」と句は、『秋しぐれ』（明和九）、『二の文』（安
 永三）、『笈草子』（安永三）など、この時代の俳書に多く寄せた句で
 ある。短冊にも、書いて与えた形跡がみえ、暁台、自信の句であつ
 た。^{（注2）}「十分に」句は、後に『暮雨巷句集』（岡崎市中央図書館蔵）に自
 ら撰ぶことになる句である。支朗（士朗）句は、『枇杷園句集』等では、
 「はつしぐれ野守が宵の言葉哉」の句形で知られるもの。

こうした暮雨巷の資料は、先ほど述べたように、随時、暁台側から
 楓京に送られたものであったと推測される。

『資料22』安永三年丈芝坊歳旦

安永二年、三年に仙台の丈芝が尾張の暁台のもとを訪れ、伊勢の逸
 漁、京都の蕪村一派と交流をもったことはつとに知られている。その
 丈芝による安永三年の暮雨巷の俳諧摺物の歳旦である。

この摺物は、小倉博氏「仙台古俳壇の諸派」（仙台郷土研究6巻2号）
 等にすでに引用がある。

暁台の「冬の情」句は、『津守舟初篇』（安永四）、『左比志遠理』（安
 永五）等に載るこの時期の代表句の一つである。「也有判暁台六番句
 合」（伊藤東吉は明和年間と推定）の第一番左がこの句である。也有
 の判詞に「左、あられの降ながら、月猶曇らざるは冬の情也といふ意
 か。」と判詞をとく。清水孝之氏は、「漢語「冬の情」は無用の説明の
 ようだが、作者独自の主情性の発露か。」とする。^{（注3）}

この四点の資料は、いずれも丈芝坊白居がらみの摺物である。大教
 院への伝来は、暁台の意向もあつたのであろうが、具体的には、丈芝
 から、楓京へ、先にみた安永三年五月の交流のおりに渡されたとみて

大過ないであろう。

三 暁台句合のその後

前引の「安永後期の加藤暁台と句合の試み」では、最後に、暁台の句合が、晩年の発句合に繋がっていく試みであった可能性を述べた。もちろん、この見解は、暁台の事例からの類推に過ぎず、今後多くの検証が必要と思われる。とともに、その見直しそのものの修正も必要となった。

拙稿では、紙幅の都合で言及できなかったが、暁台には、次のような句合摺物資料がある。藤園堂所蔵の「寛政三年冬暮雨巷摺物」(仮題)である。津島の門弟が多くみられる。原典は未見だが、国文学研究資料館マイクロフィルム^(注4)によって内容を閲覧した。マイクロフィルムのスケールを頼りにすれば、おおよそ、縦三十五糎大、横四十糎大の一枚刷である。

あらし山つれなき松を幾しぐれ

仙布

大炊川いまぞ時雨のうしろ山

青霞

枯果て月もやせ行野末かな

亀六

雨あられ枯野にまるぶ所く

い宜

(略)

月は水にころがり出たる網代かな
網代の魚月に見ゆれば水のごとし

菊溪
袋室

中く哀なるかな帰り花
見よや人風の中なるかへり花

兎石
閑亭

蕎麦がらや鹿の寐に行冬の雨
冬鹿の矢先もしらぬ眠りかな

五周
羅城

暁の山をこえ来てうき寐鳥

暁台

先の資料21摺物とよく似たタイプ一枚刷である。判詞のない句合の番いを並べている。最晩年まで、暁台の歌合にならう句合は続けられたことがわかる。「時雨」「枯野」「霜」「網代」「帰り花」「冬の鹿」を題として、左右句合がころみられ、秀句の番いが摺物として選ばれたようだ。入集者は、亀六が、津島の堀田木吾(知之)の息であり、以下、多くは、天明後期から寛政期にかけて暁台と月並発句合(暁台点帖『初ゆき』(蓬左文庫所蔵)等)で、交流のあった津島俳人ちである。『暮雨巷月並句合』にも、多くが参加する。

巻軸近くの羅城、五周は、この時代の暮雨巷の高弟である。羅城は、句合といふことでは、『暮雨巷左右句合』『十三番句合』『牡丹合』にも、参加したメンバーで、五周は、『暮雨巷左右句合』『牡丹合』にみえた古参俳人といえる。

暁台句は、『暁台句集』、『暮雨巷句集』にみえる。とくに、岡崎本『暮雨巷句集』(松下本、岡崎市中央図書館所蔵)では、朱線が引かれており、最晩年における暁台得意の発句であったようだ。

このような資料をみると、発句合、月並句合を中心とする暁台晩年において、それと並行する形で、明和安永に多用した「句合」形式も下火とはいえず、行われていたと見るべきであろう。その点において、前掲拙稿「安永後期の加藤暁台と句合の試み」の末尾に述べた見通し

をやや修正すべきことを付言しておきたい。

翻刻 白羽家資料所蔵・暮雨巷関係摺物

※翻刻にあたり、原則として、慣用の字体を用いることとした。濁点は適宜補った。改行は原典のままとした。

〔資料19〕 明和五年古川連中摺物 (図1)

摺物 (楮紙) 一枚。縦14・8糎×横33・3糎

御祓

ことし子の林鐘みちのくの古川に

廿五年の笠杖を捨て起臥自在の

店をむすび、先師が幾暁の二字を

千歳に伝へんと古川精舎のぬし

桃園先達に約し侍る

杖笠のうき名も流せ御祓川

名録

舟つなぐ柳も幣やみそぎ川

最ふ水の音も秋めく名越かな

洗はれたやうな身持や夏はらひ

蠅そへて送る御供や川やしろ

形代や瓜をまくらに添てやり

人音の戻りに涼し夏神楽

先づ孫を潜らせて見る茅輪哉

予が境内に麻斤坊の庵を

しつらひ老後の楽をすむ

古川連中

麻斤坊
汶上

麦雨

陽鷺

棠里

菟裘

雫菊

常山

田尻
和陽

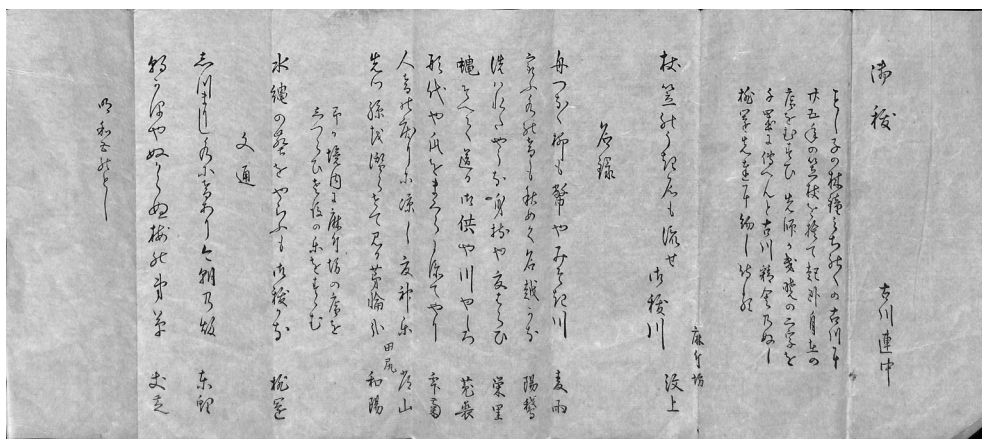


図1 明和5年 古川連中 白羽泰氏蔵

水繩の塵をやらふも御祓かな

桃園

文通

しづまりし水に音あり今朝の秋
朝がほやぬからぬ梅の弟草

東鯉
丈芝

明和五のとし

〔資料20〕 暮雨巷秋興摺物 安永二年(図2)

摺物(楮紙) 一枚。縦18・8糎×横34・0糎

此里の名にをへる富観軒に

月見る席をもふく

けふの月指さすハ不二のあたり哉

宰馬

天が下の乙女舞出よ月今宵

羅城

名月や暁寒く火の辺り

都貢

人ごゝろ月半天オカシラに静まりぬ

子東

野を広ミ月に心を放ちけり

衆甫

枝をり萩月にかざしてうたひけり

万岱

名月ハ鶴七日来るはじめ哉

支朗

有し程の月おもひ出す一夜哉

亜満

月晴て筥忘れたる思ひかな

臥央

妻子なき甲斐ありけふの月一夜

東壺

こゝろおろくし夕ぐれの雨の中

月最中雲薄き雨の光り哉

春華

雨に出て月も興あるゆふべかな

白図

癸巳中秋望

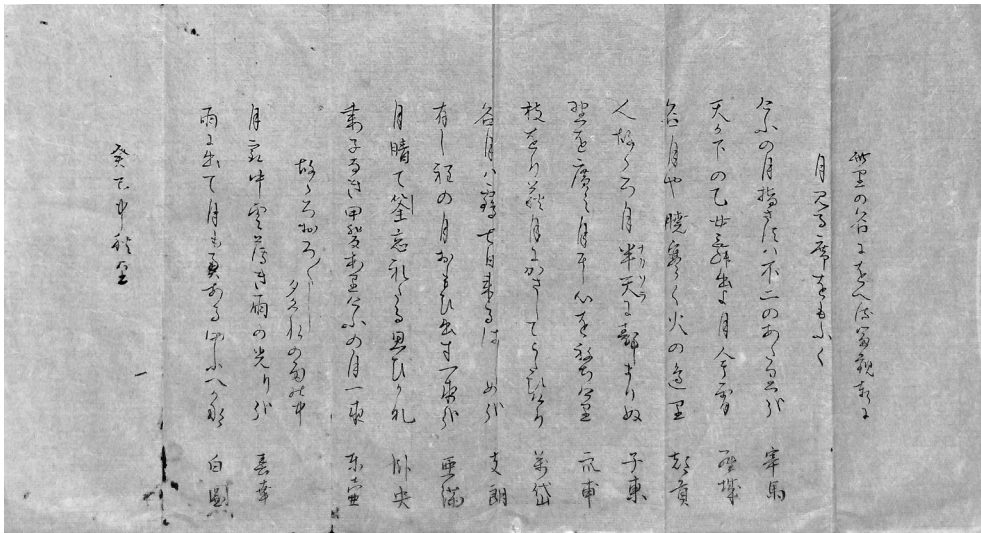


図2 暮雨巷秋興摺物 (同所蔵)

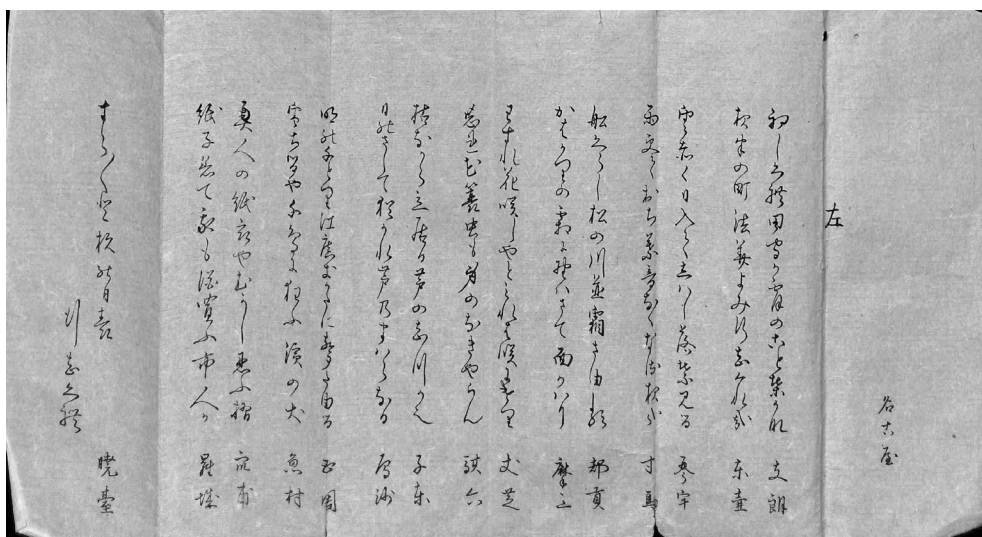


図3 暮雨巷左右句合 (同所蔵)

〔資料21〕暮雨巷左右句合 安永二年(図3)
 摺物(褚紙)二枚。左(縦18・4 糶×横33・0 糶)、右(縦18・3 糶×横33・0 糶)。

初しぐれ田守が宵のこと葉かな 夜半の町法華よみ行しぐれ哉 雲赤く日入てしバし落葉見る 雨更ておち葉音なくなる夜かな 船くらし松の川並霜さゆる かはがりの霜に野ハさて面がはり わすれ花咲しやとみれば咲にけり 忘れ花糞虫も身のなきやらん 枯ながら立居る芦のしづか也 日のさして猶かれ芦のまばらなる 明の千どり江広きかたに声たゆる 雪ちるや千鳥に狂ふ濱の犬 奥人の紙衣やむかし忍ぶ摺 紙子着て我も酒買ふ市人か	支朗 東壺 琴宇 寸馬 都貢 摩三 丈芝 駒六 子東 雁沙 五周 魚村 衆甫 羅城
--	--

すらくと杉の日表行しぐれ

暁台

〔資料22〕安永三年丈芝坊蔵旦

摺物（褚紙）。縦33・1 寸×横18・5 寸

右

安永甲午 客中元旦

時雨する日は折くぞしぐれける

文丞

又ひと、せのたくみとても

夕しぐれ畔来る人のひとり哉

魯佩

身を風葉の筆記なり

すべきわざすなり

風端ナやおち葉空ゆく日の光り

春幸

一寸の水にながる、落葉かな

烏雪

一字書て我事はじめ済したり

奥人と同巢に春をむかへて

仙台 丈芝

水行や水をはなれし草の霜

臥史

置霜やむづりともせず亀の甲

宰馬

又おもむきを同じうす。ともに

一滴の飲を好まざれば色なを

忘れはな二輪にせまる寒さ哉

斗拙

意にあらず。渠に妻なし、我に

女なし。もの、哀も何よりかしらん

わすれ花に忘れぬ風の夕かな

蕪転

たゞ風月の閑にひかれ煙霞の

枯芦に小蝦ながる、日むけ哉

亜満

跡なきに情をこらすのミ

芦かれて雨にたハ、ぬ強みかな

蕃涉

何ともな生男ふたり恵方向

高波や千鳥みだれて寄かねる

万岱

寒夜桂葉下の茶に酔て

しば啼やうき身が船の友千どり

何大

狗樟のほとほりに鼻さし合せつゝ、

夜の風ひそかに紙衣さハリ哉

帯梅

冬の情月明らかに霰降る

紙衣の名どころ問ん年四十

白囧

河原おもての鴨さハぐ宵

十分に紅葉の冬となりにけり

暁台

この里に城の大鐘鑄おろして

丈芝

注

1 拙稿「安永前期における暁台の伊勢行について―丈芝坊白居易と逸漁の交流を通して―」（東海近世20号、平成24年7月）に丈芝と伊勢の逸漁の交流を詳述した。

2 『福地書店和本書画目録』（令和二年春季号 和本・刷物・書画特集）一二七頁参照。

3 清水孝之氏『加藤暁台 研究・鑑賞・資料』（和泉書院、平成8年）による。

4 国文学研究資料館のマイクロ・フィルムによる。請求番号は、ト5 30123。

〔付記〕本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C）課題番号17K02471）による成果の一部である。翻字の錯誤については、大かたの御教示を乞いたい。貴重な所蔵資料の紹介をご許可いただいた東海市の白羽泰氏に深謝申し上げたい。